志賀直哉全集

第十一巻

志賀直哉全集　第十一卷
第八回配本（全十四卷・付別卷）

昭和四十八年十二月十八日　發行

定價　二千四百圓

著者　志賀直哉

發行者　岩波雄二郎

發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 志賀直吉 1973

日記二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

昭和四年・昭和五年……三
昭和六年……二九
昭和八年……九五
昭和九年……一九九
山中日誌……二九五
昭和十年……三二一
昭和十一年……三九九
昭和十二年……四三五
昭和十三年……四五一
昭和十四年……四七三

昭和十五年……五二三
昭和十六年……五六一
昭和二十年……六〇七
昭和二十二年……六一九
昭和二十三年……六二一
昭和二十四年……六二七
昭和二十六年（大洞臺日誌）……六三五
昭和二十七年（壬辰日誌）……八〇七
昭和二十八年（山上日誌）……八七九
昭和三十三年（常盤松日記）……九三三
昭和三十五年（澁谷日記）……九六一
後　記……九七九

昭和四年——昭和三十五年

昭和四年・昭和五年

〔四十六歳〕

滿洲旅行

昭和四年十二月

○二十二日

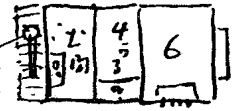
早朝奈良發、京都にて朝八時四十七分着の里見と一緒になる。川西氏一緒に來る、お福　小福　おとめも出迎へに來て花外へ落ちつく、

午后、一人買物に出る、開寧の鉢を求む、夜食後八時八分？　特急にて西下

夜滊車の寢臺惡く、風もれる、里見風邪をひく

○二十三日

朝下ノ關着　滿鐵案内所の石田芳雄君の案内にて自分だけ壇ノ浦　長府を見物する　乃木大將誕生の家を見る、一寸いゝ家だつた、屋根裏天井ヨシズ



足で踏む臼軒下にある、

（石田君の話）岸田の遺骸とすれちがひになる。

日に三升づゝのみし由　作り酒やにて死ぬ朝床の中で歌を唄つてゐた由、

何とかいふ禪寺を見る、門、中々よろし、

大吉に伊吾待つてゐる、ふぐを食ふ、大いにうまし、藝者三四人來てゐる、

一時出航のうらる丸にのる、ふぐを折りに入れて持つて行く、うらる丸七千トン近きよき船　海割りに荒れる、

伊吾航海中少しよふ、自分、平氣、夜、事務長等と麻雀をする、二時頃ねる、

○二十四日

曇天、終日船ゆれ、船客食堂に出づるもの少し　伊吾風邪直らず、早朝朝セン南端の多島海へ入る、夜、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

又麻雀をする、事務長、機關長 伊吾 自分の四人、（夜大連より無線電信にて和洋いづれの宿を望かをきいてくる）

夜四時まで話す

ヒル時差三十分

○二十五日、

九時近く大連港へ入る　山に雪あり、ジャンク帆走す、皆支那人なり、支那に來たといふ氣する、

船とまると共に新聞記者滿鐵からよこされたビューローの林君ともう一人來る　伊吾新聞記者に話す、

此旅、伊吾が主になる風あり、自分は大いに樂なり、

岩ペキ[ママ]に眞山孝次、中澤一雄 佐々木秀光君達迎ひに來てゐる、支那苦力等サンバシに働くを見る、滿鐵ノ自動車にて大和ホテルへ行く、

御眞影一緒の船にあつて、物々しく警官等つき添つて運ぶ、

部屋はがんがらがんにて感じ悪し、煖房は充分なり

早速支那服やを呼びあつらへる　眞山君の指圖にてきめる、寸法のとり方呑氣にて面白し、まどかけのひもにて首まわりを計る、

ヒル食後、少しねむる、四時半頃起きる、

夜林君の案内にて、町へ出、ミカド食堂といふ地下の食堂に會あり、そこへ行く、支那人のボーイ、女給なり、そこを見て、伊勢町にてくつ三つ下シャツ四つ、それとカバンを買ひ、十時頃より佐々木も共々永原醫師の家に行き、石濤 八大山人、新羅山人等を見る、石濤の尺八の幅よし　新羅山人の猿もよろし、石濤の帖に二つ程いゝのがあつた、十二時頃ホテルへかへる、二時頃まで話す、

此日も三十分オクラセル

○二十六日

弓彦よりの電話で起きる、間もなく弓彦來る、

長谷川錄郎金地の色紙を持つて來る　東西南北歸去來の詩を書く、弓彦かへる、眞山 中澤等來る、ヒル近く滿鐵の自動車にて本社へ行き、營業課長市川數藏氏、旅客主任貝塚氏に會ひ、伊澤道雄氏(涉外課長)にも話をきく、谷崎君の同窓、

旅順に向ふ、星ヶ浦のホテルにて晝食、(氣持よき所)　蒲郡に似て更によし、

旅順に向ふ、途中農家の樣面白し、烏といひ、朝鮮烏ともいふ、喜鳥の巢、寄生木の如く澤山ある、横腹の白き尾の長き鳥、これも面白し、

旅順驛長九里法學士の案内にて東雞冠山の古戰場を見る、寒風シミ透る、說明精しく見るが如し　旅順の町小女郎屋あり、溝の氷の上に子供等、貝獨樂を鞭にてまわしてゐる

雞冠山に向ふ前よきとう器あるといふ博物館へ行つたが大正天皇祭の翌日にて休みで見られず
（公學堂の子供）
かへり此邊に張宗ショウのゐた所を見る　ホテルへ歸ると弓彦バアーへ來てゐる　梅谷一緒になる、共に弓彦の家へ行く　ペチカを見る、子供や妻君、弓彦の妹等に會ふ、北京鴨子（ペキンヤーズ）の御馳走になる　非常にうまし、
食后、古い手紙や寫眞を見る　自分の手紙面白し、
一日日（イチニチヒニチ）が遲れる等の文句ある、十二時近かくかへる、
伊吾風邪にて元氣なし
パイレイト（老刀碑）

○二十七日、
朝林君誘ひに來て三人にて滿鐵本社へ行く　眞山君も共に　頭（ア）の支社へ行き佐田に會ふ　眞山君に別れ、三人にて豐年油房を見に行く、最初にいつた所は科學的にやる方法、所長は山際を知つてゐる、荷を積み出す所も面白かつた、それから今度は古い方法でやる三泰油房を見た、蒸したのを型に入れ、あつさくさす、皆支那人素裸で働いてゐる、二三十人が眞裸で働く樣珍らし、
歸つて、大和ホテルの取締支配人の招待にて晝食、

午后少ケイの后、自動車にて小崗子の方の小盗兒市場を見に行く　小さい妓樓澤山ある、アハのパンを食つて見る　食へず

歸途もう少しましな支那妓樓のある町を自動車にて通つて見る

歸ると、談話會の連中待つてゐて、そこへ出る、小林氏のVとM話、多し、

情報課の活動寫眞を見る、ラマ寺の祭り孔子祭りのもの面白し

疲れて睡むし（ハルピンの復活祭のフィルムも見る、）

○二十八日

朝九時の瀛車にのる、三人の他眞山、菊竹氏一緒。弓彦送つてくれる、

滿鐵に初めてのる、立派なり、又御眞影と一緒になる、談話室にて菊竹氏の話を聞く

賊眼佛心王八命

金州行きをやめ直ぐ熊嶽城へ行く　滿州八旗の中、城內見物、支那井戸、うらなひ、――さなぎを賣る者、食つて見せる、豚のはなし飼ひ、――ガタ自動車出でず（自動車の油氷る故毛布をかけてある、）

熊嶽城溫泉へ行く　餘りきれいでなし、頭痛で風呂やめる、夜將ギをする、菊竹氏伊吾に話す、伊吾入浴して、あと惡し　だん房不充分

菊竹氏一時の瀛車にて奉天へ向ふ、

○二十九日

熊嶽城より三等車にのり大石橋まで行く、支那人くさし、

大石橋より二等にのりかへ、營口に行く　前日來てゐた眞山氏その他に迎へられ、自動車にて營口見物に出る

マンテツの倉庫の所から遼河を見る　結氷して人々歩いてゐる、

町を廻はり、公園のわきから又河を見る、トロッコの車のないやうなものを棹で漕ぐソリあり、支那巡査それらを怒つてゐる、そのソリ却々早く氣持よさゝうで乘つて見たかつた、客もないのに原つぱのやうな氷の上を一人でこいでゐた。(人力車はカヂ棒無暗と長し)

町の菓子やへ行き雜貨店によつて支那の耳の隱れる帽子を買ふ　具合よし。銀のうで輪をかう(金標銀標は十と八の割合)　大洋(ターヤン)小洋。廓(ピンカンリ)のやうな場所にある、滙海樓(ホイハイロウ)に行く　大勢ゐる、

コノ室

新聞社の人黑もんつきで來て色々話す、ねむくなる、

支那人藝者三人來る　鴨子(ヤーズ)うまし　滿州第一の飯店の由、結コン式ある　皆に送られ停車場へかへる、

列車に老醫師の娘來る　アミノさんの友達の稻葉さんの友にて自分の事よく聞く由いふ、

大石橋ののりかへでプラトフォムの食堂に休む、

支那官吏らしき大男食事してゐる、菓子の間違ひ滑稽。

夜に入り湯崗子着、
湯氣持よし　宿のセツビよし、頭痛する、麻雀をする、
支那人の按摩を頼む、具合よし
里見熱ある、

三十日
充分にねる、
一人ぶら〳〵暮らす、
驛の向ふの丘に娘々廟あり

三十一日
十一時發、貨車で遼陽に向ふ、貨車中々エラシ
遼陽では(黑溝臺へ八里何丁　三十八年一月二十七日?)驛員の案內で滿鐵の馬車にて白塔——スケート　天齋廟、——關帝廟(老爺廟)見物
子供寫眞の黑い紙を爭ふて貰ひたがる、三時半の滊車にて鐵嶺へ向ふ、事ム所長藻寄氏(松村と同期)靑柳驛長等迎へてくれ、松花ホテルへ入る、テツレーホテル桝谷　峯ゐるかと思ひいつて見る。ちがう。松

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com